

役所言葉届かぬ緊迫感

「自ら避難」

住民心理 意識変化も

行政の提供する災害情報は、住民の心に響いているか。東日本大震災を機に発足したNPO法人「防災のことば研究会」で代表理事を務める東洋大の新井恭子准教授は、言語学の観点から広島土砂災害を検証し

ている。

重要度低い印象

例えば、広島市防災行政無線の放送内容。「土砂災害発生の危険が高まっています」との大事な一文が「なお、」で始まった例は「付け足しで重要度が低い印象を与える」。まず「区災害警戒本部を設置した」と行政の態勢に触れ、その後「土砂災害警戒情報が発表され」と大事な点を説明しているのも、聞き手の注意力を欠くことにつながると

いう。

実際に、新井准教授による聞き取り調査で、自主防災組織の幹部は「防災無線の表現がだらだらしていて、途中で聞くのをやめた」と証言。別の消防団員は「お役所言葉でなく『山がずった。はよ逃げえ』と言えば、住民は動いてくれる」と話した。

新井准教授は「命令調が効果的な場合もあるが、上から目線が嫌がられることもあり、加減が必要」と指摘。録音よりライブ（生放送）の方が新しい情報などの印象を与えられる▽判断材料の情報なのか、説得なのか、意図を明確にする▽川の水位など目に浮かぶ証拠を示す一などの点を工夫すれば、聞き手を引き付け

▶広島市防災行政無線の問題点(昨年8月20日午前1時41分の放送)

(チャイム音)広島市からお知らせします。

平成26年8月20日1時35分をもって、安佐南区、安佐北区、佐伯区に災害警戒本部を設置しました。

なお、広島市に土砂災害警戒情報が発表され、土砂災害発生の危険が高まっています。

日時、行政の態勢は不要。間延びする
「なお、」は「付け足し」の印象を与える
最も重要な情報なのに、説明が遅い

崖の近くなど土砂災害の発生しやすい地区にお住まいの方は、異常を感じた場合、早めの避難を心がけてください。

「～の場合」といった条件文は迷いを与える

▶聞き手に伝わりやすい文の例

(サイレン)緊急放送、緊急放送。土砂災害警戒情報を発令。こちらは広島市です。さきほど広島市に土砂災害警戒情報が発表されました。土砂災害の危険性が高まっています。今後の気象情報に注意し、避難準備を始めてください。土砂災害警戒区域にお住まいの方は、早めに避難してください。

※状況に応じて、より短く、緊迫感を示す表現を使う

(新井恭子・東洋大准教授による)

性を把握する(67.3%)
「避難所を確認しておく」(53.8%)
「早めに自主避難する」(同)がトップ
3。「危険な場所を開発すべきでない」「避難用の荷物を準備しておく」などが40%台で、「砂防えん堤や崖崩れ対策などの防災施設を建設」「行政の防災対応を迅速にする」は20%台前半にとどまった。

佐北両区の住民計400人をインターネットを通じて調査した。

ハードには限界

住民が挙げた、今回の土砂災害の教訓は、複数選択で「自分が住む地域の危険

整備や情報だけでは災害は防げないという認識が広まっている可能性がある。その上で今回の豪雨を経験した住民は、行政頼みでなく、自ら危険を回避しなければ、との考えを一層強めたのではないかと分析する。

広島土砂災害を追う

第4部

研究者の目

④

中国新聞 平成27年3月27日(金)